

実施年度	: 2020 (2021 入試) 年度
試験日	: 2021 年 2 月 22 日
入試種別	: 外国人留学生 大学院 (博士後期課程) 入学試験問題
学部・研究科	: 文学研究科 真宗学専攻
科目名	: 専門科目

【解答又は解答例】

※解答について、論述問題のため一義的な回答とはならないことから、参考として、解答の一例を示す。

1

- (1) 阿弥陀仏の安楽浄土のうるわしいすがたを見ることができるのは、ただ仏がただだけである。その果てしないことは大空のようであり、廣大できわまりがない。(『高僧和讃』(12) 天親讃)

阿弥陀仏の浄土に往生すると、速やかにこの上ない涅槃のさとりを開き、そのまま大いなる慈悲の心をおこすのである。このことを阿弥陀仏のはたらきによる回向というのである。(『高僧和讃』(20) 天親讃)

- (2) 浄土とは穢土に対する大涅槃の世界を表す語である。浄土教において、菩薩の智慧清浄の行業によって建立された清浄な国土であり、煩惱の穢れをはなれた清らかな世界である。浄刹、浄界、浄邦などともいう。阿弥陀仏の浄土は、『無量寿経』に安楽、安養と説かれ、『観無量寿経』『阿弥陀経』などに極楽と説かれる。『観無量寿経』には「阿弥陀仏ここを去ること遠からず(去此不遠)」とあり、仏は苦悩の衆生を慈しみ、いつもそばにいて汝のために苦悩を除く法を解き明かすと示されている。一方、『阿弥陀経』には「これより西方、十万億の仏土を過ぎて世界あり。名づけて極楽という」とあり、この世は汚濁に満ちた世界であるから、極楽浄土はこの世界から西方に十万億土を過ぎたところにある遠い世界であると説かれている。したがって、極楽がすべてのものをわけへだてなく迎える優しい世界であるとともに、人間の罪業性を省みると、極楽はここから遙か遠いの世界でもある。親鸞は弥陀の浄土についてこう説いている。「皆悉到彼國」といふは御ちかひのみなを信じて生まれむとおもふ人はみなもれずかの浄土にいたるとまふす御こと也。(『尊号真像銘文』正嘉本) このように親鸞は、本願の名号を信じて生まれんと願う人を弥陀仏が誰一人取り残さずに浄土に到らせると明かした。親鸞は阿弥陀仏の浄土を真実報土と方便化土と区別するが、真仮あわせて大悲の願海に酬報した報土であると「真仏土巻」に明かしている。

※『浄土真宗聖典註釈版第二版』、『三帖和讃現代語版』、本願寺出版社、『定本親鸞聖人全集』法蔵館などを参照

- 2 親鸞の救済観の特質は、『顕浄土真実教行証文類』などに著されている。『教行証

文類』「教巻」に「つつしんで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について真実の教行信証あり」と説かれ、「証巻」に「還相回向といふは、すなわちこれ利他教化地の益なり」と説いた。親鸞は、往相回向も還相回向もすべて阿弥陀如来の本願力回向であるとし、「往還回向由他力」（「正信念仏偈」）と明かした。回向の主体を人間に置かず、回向、救いの恵みの主体を阿弥陀仏にあるとした。煩惱具足の凡夫が浄土に往生する往相も、浄土に往生して大涅槃をひらき、ただちに大悲をおこして再び迷いの世界に還り来て、衆生を導く還相のはたらきも、阿弥陀仏が本願によって衆生に施し与えるものとする。

如来の大悲にいだかれて、願われて生かされるいのちであることに気づくと、すべては御同朋御同行、仲間として支え合い、敬い合う姿勢がうまれてくる。しかも大悲に照らされて、自らの愚かさや無力さを知ることにもなる。仏の縁起の教えをいただいて、決して「毒を好まず」、傲慢にならないように、わが身を省みながら、それでも世界の安穩のためにできることを精一杯するところに、念仏者の生きる姿勢があるだろう。実際に行われている念仏者の社会实践は、医療と福祉と仏教のチームワークによって苦悩を抱えた人々に寄り添い、支援するビハーラ活動や、ハンセン氏病差別などの現実を省みて、少しでも人間が平等に認め合って生きられる社会をめざす同朋運動、戦争で亡くなった方々を追悼し平和を願う平和運動、さらに災害復興支援活動、子ども食堂などの地域福祉に貢献する活動など多様な活動がある。仏の願いに照らし護られて、人々の心と心がつながり、自己を支える多くの生命や物に感謝し、安心して生きられる居場所を共につくっていくことが仏教徒に求められているだろう。

※真宗学専攻博士後期課程の研究領域には、真宗教義学・浄土教理史・真宗教学史・真宗伝道学（実践真宗学）の四領域があります。龍谷大学真宗学会の学術雑誌『真宗学』、龍谷大学大学院文学研究科真宗学専攻のパンフレット、世界中のさまざまな苦悩に応える親鸞の教えと実践に関する研究書を参照して自由に書いてください。